

はじめに

我々の祖先たちは、自分たちの生活と文学・思想・学問をはじめとする文化万般を支える言語、日本語をどのような方向に動かし来たったのか。そして、我々は、今、どこにいるのか。

日本語の歴史についての研究は、日本語の研究の中で最も進んでいる研究分野であり、その中でも音韻史についての研究は優れた研究成果を数多く生み出して来た研究分野である。それらの成果は、輝き続け、今も我々を惹き付けてやまない。しかしながら、一歩退いて考えてみると、それらは、限られた或る時代の限られた或る言語事象についての研究にとどまっていたのではないかと思う。その後、資料の細部、言語事象の細部にわたって進められている研究も多く個別的な事象の個別的な説明に力を注いでいる。日本語の歴史全体を捉えることを本旨とするはずの『国語史概説』『日本語の歴史』と題する成果は、時代区分をし、多くは各時代を専門とする研究者が分担して、その各時代ごとに、例えば音韻史について言えば、母音、子音、音節、連音上の法則、アクセントなどのように項目を立て、更にもその中を、子音についてはカ行音・サ行音・タ行音・ハ行音といった順番にその音価について解説して来た。各時代の言語がどのようなものであったのかを整理・記述しておくことも必要なことである。

しかし、日本語の歴史が「昔の日本語」とどまっていてよいはずはない。日本語の歴史は、これらの研究を踏まえてはじめて記した問いに答えなくてはならない。

我々の祖先たちは日本語をどのような方向に動かしたのか。そして、我々は今どこにいるのか？

どうすれば我々は右の問いに答えることができるのか。私は、言語事象の羅列を避けた、歴史としての説明を意図して、日本語音韻史について次の二つの試みを世に問うたことがある。

『室町時代の国語』（東京堂 一九八五・九）

『室町時代語 日本語音韻史』（武蔵野書院 一九九三・六）
を通過して見た

一つ一つの事象を孤立させることなく、相互の関係を因果律で把握・説明しようと試みたが、成功しているとは言い難いものにとどまっている。しかし、この二書を書いて、これを突き放して客観視することができるようになって、私なりに右の問いに答える方法、少なくともその一つの方法たり得るのではないかと考えるものを探り得たような気がしている。右の二書における音韻史についての考究に致命的に欠けていたものが二つあった。一つは中軸になるものを把握できていなかったことである。中軸を把握していない説明は蛇行する。そして、欠けていたもう一つは価値評価であった。生起した言語事象について価値評価をすることをしなかったために中軸の把握もできなかったのだと考えられる。

この反省に立って、私は、研究者が研究を進めて行くうちに育んで行った言語史観に立って、日本語の歴史の上に起きた最も重大な出来事を感じ、これを中心に据えて、歴史を説明することによって、日本語の歴史を歴史にすることができないのではないかと考えるようになった。少なくともそれが一つの道ではないかと考える。重大な出来事、というのは極めて主観的で、曖昧な表現であるが、歴史が一人の研究者の目から見た説明である以上、それでよい、というよりも、その判断こそが研究者に求められているのではないか。研究者の判断とは言っても、恣意的であってよいはずは、もとよりない。それを判断する基準はある。一つは、その出来事が生起したことの影響が日本語のさまざまなところに広く及んでいることである。それがどんなに大きな変化であってもそれがそれだけの範囲でとどまっているような出来事は重大とは言えない。そしてもう一つは、その出来事が日本語にさまざまな功罪をもたらしたにしても、結局のところは望ましいことをもたらしているということではなくてはならない。言語は、それを使うすべての人が自らが表現したいことをより表現できるものへと無意識の意識のもとに動かして行くものだからである。

そのように考えた時、私は、

私たちが知り得るこの千数百年の日本語音韻史の上に生起した最も重大な出来事は、音使、
（音使） だっ
たのではないか、

そして、

これを中心に据えることによって日本語の歴史を説明することができるのではないかと、そう考えるようになった。

ここでいささか唐突なのであるが、今も口をついて出て来る暗唱の言葉の一つに「ヒクウヒチリツビミンキギイ」という句がある。確か中学二年生の国語の教室で習ったもので、音便の四種とそこに生じた音変化を覚えるためのものであったと思われる。

	動詞連用形	形容詞連用形	同連体形	音便
ヒ・ク ↓ウ	習ヒテ↓習ウテ	白ク↓白ウ		ウ音便
ヒ・チ・リ↓ツ	習ヒテ↓習ツテ、持チテ↓持ツテ			促音便
ニ・ビ・ミ↓ン	取リテ↓取ツテ 死ニテ↓死ンデ、遊ビテ↓遊ンデ 置ミテ↓置ンデ			撥音便
キ・ギ ↓イ	書キテ↓書イテ、漕ギテ↓漕イデ	白キ↓白イ		イ音便

このことを短い言葉で暗唱したことはその後日本語の歴史を専攻するようになってからも役立って来たように思う。ところが、他方で、中学という早い段階で音便を学習してしまったために、それが日本語音韻史を動かした最も重大な出来事であった、ということに気付くのに手間取ってしまったのであった。あまりにも基礎的な知識として早く身に付けてしまったためにこれを正面に据えて

重視することができなかつたのだと思う。しかし、考えてみれば、ありふれた基礎的な出来事であるからこそ日本語音韻史上の重大な出来事にふさわしいことではなかったのではないかと。重要なことは、あからさまに目に見えて、一番近いところにある、そういうものなのだ。

私は、新しい世紀と新しい千年紀を、居を移して数年、まだ住み馴れない古都奈良の地で迎えた。馬齢を重ねて六〇歳、大学の停年を間近に迎えようとしていた。世紀・千年紀という区切りに大きな意味はないかも知れないけれども、今にして思うと、私にとってあらゆるものが一つの区切りを迎えていた。人は二〇世紀を振り返って「戦争の世紀」と呼ぶ。この呼称は、二度と繰り返してはならない悲惨極まりない世紀を総括する言葉であると同時に、新しい世紀への我々の覚悟を示すものでなくてはならない。

古い千年紀が逝くのを送って、私は、私の日本語音韻史を提出しようとする今、本巻に「音便の千年紀」と副題することとした。右述のような途方もなく大きくて難解な主題にこの小冊をもって立ち向かうのは無謀に過ぎるかも知れないけれども、小冊ゆえに、韜晦する余地などはなく、却って事を明確にし得るのではないかと考え、ともかく歩み出してみたいと思う。

はじめに 3

一 古代日本語と近代日本語

橋本進吉氏の指摘 14 / 母音連続の忌避 17 / 母音連続忌避の例外 18 / イ音便のはしり―「權」「搔イ貫キ」 20 / 「權」をイ音便と見ない立場 23 / 母音連続を積極的に生み出したイ音便 25

二 上代特殊仮名遣い

上代特殊仮名遣いの歴史的意味―従来の受けとめ方 28 / 上代特殊仮名遣い 29 / 発見の影響 30 / 上代日本語六母音説 33 / 上代日本語五母音説 34 / オ段甲乙二類の音による知的意味の弁別 37 / オ段甲乙の相補分布説 38 / 「母音交替」は静的に観察した対応関係 40 / 造語法としての母音交替は擬声擬態語に限られる 41 / 上代語の母音交替例 43 / 生産性の高い造語法は複合である 45 / 先史日本語四母音説 46 / CUCO 247 / 森重敏氏の五母音説 49 / 後発転成

三 母音連続に生じた脱落

母音の性質 50 / 「リ」と「タリ」 52 / 存続表現の原初形 54 / 〈テアリ↓タリ〉の成立と展開 56 / 甲乙二類の混乱と混同 58 / 上代特殊仮名遣い(八母音体系)の歴史的意味 58
生起した時期 82 / 漢字音の母音連続 86

四 脱落・転成を起こさぬ母音連続―母音連続型字余り

先学の研究 88 / 素朴な直感に立ち戻ると 91 / 単純語に現れる母音連続 93 / 複合語に現れる母音連続 94 / 二つの文節の切れ目にまたがって現れる母音連続 99 / 非字余り句の現れ方の片寄り 100 / 「五音節目の第二母音以下」 102 / 第二・第四句の二分唱詠 104 / 文構造上の関係 105 / 字余りになりやすい文構造関係 108 / 字余りになりにくい文構造関係 110 / 短句第一・第三句と長句第二・第四句 111 / 第五句 112 / 母音連続の性格 114 / 上代日本語の母音連続 115

五 音便

音便はなぜ起きたのか―先学の説120／音便は何をもたらしたかという視点122／促音便・撥音便のはしり123／音便のはしりに音便生起の原因を見る129／音便生起の時期133／カ・ガ行動詞イ音便生起の原因137／ウ音便139／四段活用動詞は音便を起こし、上二段活用動詞は音便を起こさないのはなぜか140／イ音便が一般化し、定着した原因―音節構造の転換143／ウ音便146／促音便・撥音便のはしり―合わせて鼻母音について146／促音便・撥音便が一般化し、定着した原因―促音・撥音の成立148／外来語である漢語の扱い151／音便生起の原因152

六 非母音連続型字余り

非母音連続型字余りと母音や子音の脱落154／非母音連続型字余りと促音便155／非母音連続型字余りと撥音便156／重音脱落1(子音の脱落)と非母音連続型字余り159／重音脱落2(母音の脱落)と非母音連続型字余り160／語頭狭母音の脱落と非母音連続型字余り162／脱落で説明できない非母音連続型字余り(短歌)164／脱落で説明できない非母音連続型字余り(長歌)167

七 長音

「加安」〔蚊〕〔紀伊〕174／後発転成母音174／一音節名詞の長音176／二音節第五類名詞180／中止法・終止法の下降調182／形容詞の終止形・連体形183／サ変動詞の終止形185／動詞連用形186／その他の中止法・終止法186／動詞の連体形188／一音節動詞の補強189／母音連続190／強調の長音191／感動詞192／古代語の長音193／近代語の長音194／古代語の長音と近代語の長音195

八 拗音

平安初期における拗音表記198／ア行表記199／ヤ行表記200／音節構造転換後の拗音203／類音字表記のことなど205／拗音206／音節構造の転換と撥音・促音の生成207

一 古代日本語と近代日本語